

○ ショッピングモール・外観

セミの声が聞こえる。

○ 同・中

多くの人でにぎわっている。

巻田佳史^{まきたよしあき}（32）、妻・優香里^{ゆかり}（30）と娘・ひ

まり（6）と共に楽しそうに歩いている。
る。

ひまり「アイス食べたあい」

優香里「先におひるにしようよー」

ひまり「パパも食べたいよね？」

佳史「そうだねえ」

優香里「パパはひまりに甘すぎっ」

反対方向から石井茉莉^{まこ}（32）と夫・

瑞生^{みずき}（34）も腕を組んで歩いてくる。

瑞生「おひるどうする？」

茉莉「なに食べよつかー」

すれ違う佳史家族と茉莉夫婦。

一瞬、目が合う佳史と茉莉。

× × ×

（フラッシュ・回想）
笑い合う制服姿の佳史と茉子。
×
振り返る佳史と茉子。
茉子の視線の先。
微笑む優香里と、佳史の手をぎゅっと握るひまり。
佳史の視線の先。
優しく茉子を見つめる瑞生。
×
（フラッシュ・イメージ）
ころがるこんぺいとう。
×
手を繋ぐひまりを見る佳史。
瑞生を見上げる茉子。
そっと距離が離れていく。
客
「キヤーーー！！」
叫び声が遠くからいくつも上がる。
驚く茉子。
何ごとかと周囲を見る佳史。

逃げ惑う客。
ざっと人混みが二手に分かれ、倒れて
いる人が数人、現れる。
血だまりも見える。
そこに、包丁を持った少年A（17）。
ふらふらと歩き出す。
茉莉の腕を取り、駆けだす瑞生。
佳史、ひまりを抱え、優香里の背中を
押し、逃げるよう促す。
少年の動向を目で追う茉莉。
同じく振り返り様子を見る佳史。
逃げる客の中で、少女がつまずいて動
けなくなる。
そこへ狙いを定め、ゆっくりと近づく
少年A。
その動きに気づき、瑞生の手を振り払
って駆け出す茉莉。
客たちの叫び声にかき消される瑞生の
声。
歩みを早める少年A。

怯える少女。

少女へ腕を伸ばす茉莉。

包丁を振り上げる少年A。

少女を抱きしめ、ぎゅっと目をつむる

茉莉。

振り下ろされる少年Aの腕。

どんつと衝撃に目をそつと開ける茉莉。

茉莉の目の前には佳史の頭。背中で包

丁を受け止めている。

少年A 「あああああ！！」

と奇声をあげ、何度も包丁を振り下ろ

す。

恐怖で声が出ない茉莉。少女をきつく

抱きしめる。

客の悲鳴がいつそう増す。

警備員が駆け付け、少年Aを取り押さ

える。

少年A、警備員を振りほどき、駆けな

がら自らの首を切る。その場に倒れる。

佳史、力なく茉莉に寄りかかる。

茉子、何かを言おうとするも声にならない。

佳史、茉子の頬をそっと両手で包み、

佳史「――」

茉子にキスをする。

そして、そのまま倒れていく。

顔が血まみれになる茉子。

腕の力が抜け、少女はその場を離れて

いく。

啞然とする茉子。

○ニュース映像

キャスター「少年は、その場で自らの首を切り、自殺したもようです」

顔の映らないインタビュー映像に切り替わる。

女性「なんか、何度も刺されていて、（涙声になつて）子どもと奥さんかな、守っていたように見えました」

○新聞記事

記事「和やかなショッピングモールで

惨劇 死者1名 重傷者3名 けが人

多数

「容疑者死亡 動機は不明」

○SNS

コメント「お父さん、唯一の死者に……」

コメント「お子さんと奥さん守ったって、お

父さんヒーローじゃん。ご冥福をお祈りし

ます」

コメント「死に際にキスしたらしいよ。愛だ

ね」

○石井家マンション・リビング

スマホを見ている茉子。

そのスマホをそつと手で覆う瑞生。

瑞生を見上げる茉子。

首を横に振る瑞生。

茉子、スマホを伏せてテーブルに置く。

テレビ「続いてのニュースです。先日、ショッピングモールで起きた……」

瑞生、テレビの電源を切る。

部屋は昼間だが、カーテンが引かれて
いる。

瑞生、そっとカーテンから外を窺う。

マスコミと思われる人々が数名、見受
けられる。

ため息をつき、カーテンを閉める瑞生。

茉莉「ごめん……」

瑞生「どうして？」

茉莉「だって、私があの時……」

瑞生「悪いのは犯人。全部、犯人」

茉莉「……うん」

瑞生、茉莉をそっと抱きしめて、

瑞生「茉莉が無事で、本当によかった」

茉莉「……」

茉莉、瑞生の背中にそっと腕を回すも、

視線はスマホに向いている。

そっと唇を噛む。

○学校、会社など（日替わり）

人々がスマホを見て顔をしかめ、話をしている。

○ネット動画・巻田家前

複数のマイクを向けられる優香里。
その後ろに、隠れるようにひまり。

優香里「あの女は、母親なんかじゃない！

家族でもない！佳史くんの家族は、私たち、私たちなんです！」

○石井家マンション・玄関前

ドアには複数の張り紙や落書き。

『寝取り女』『死ね』『出て行け』など。

○同・リビング

テーブルの上のスマホが鳴る。
びくつく茉莉。

表示は、非通知。

瑞生、スマホの電源を切る。

瑞生「知り合い、だったんだね」

茉子「ごめんなさい。でももう何年も会ってなくて、向こうも覚えていたのかどうか」

瑞生「じゃあ……あれは？」

茉子「何かの間違い！ だってあの状況、意識だって混濁していただろうし」

と、手が震え出す。

瑞生、慌てて茉子を抱きしめ、

瑞生「ごめん、思い出さなくていい、ごめん、悪かった」

そっと頷く茉子。

瑞生「嫌がらせは、そのうち飽きてなくなると思うんだ。管理人さんも様子を見ようって言うってくれてるし」

頷く、茉子。

瑞生「でも、向こうのご家族とは話をした方がいいかもしれない。どうだろう？」

茉子「そう、だよね」

瑞生「大丈夫、僕も行く。一緒に行つて、今は繋がりがなかったことを説明しよう」

○巻田家・リビング（日替わり）

向かい合つて座る優香里と茉莉、瑞生。

茉莉、菓子折りを差し出すも、優香里は顔を背け受け取らない。

困惑する茉莉。

茉莉の背中をさする瑞生。

茉莉「…：あれは、何かの間違いです」

優香里「何かつて何？ 同級生だったの、隠

していたわよね！？」

茉莉「そんなつもりじゃ…：何年も会つてい

なかつたからで。それに、あの状況では…

…」

優香里「じゃあ何！？ 佳史くんは誰にでも

あーゆーことする男だつて言いたいわ

け！？」

茉莉「違います！ あれは、あれは…：」

瑞生、心配そうに見守る。

茉莉「あなたと、間違えたのだと思います」

優香里「……！？」

茉莉「あの時、しっかりと聞き取れなかったけれど、誰か名前を呼んだような気がするんです。娘さんくらいの歳の子もあの場について。きっと、巻田さんに最後に見えていたのは、あなたたち家族だと思います」

優香里「わっと泣き出す」

茉莉「それでも、嫌な思いをさせてしまったってごめんなさい」

茉莉と瑞生、頭を下げる。

瑞生「私たちは事件の被害者同士です。お互い、傷を癒す時間も必要でしょう。もうマスコミと関わるのもやめて、静かに暮らしませんか」

優香里「そうですね、もう会うのはやめましよう」

カーテンの隙間からは、記者が数人見える。

×
×
×

勝手口で靴を履く茉莉と瑞生。

見送りに立つ優香里。

茉莉、はっとして顔を上げて、

茉莉「あ、あのお線香……」

瑞生「茉莉！」

優香里「お気になさらず。二度と来なくて結構ですのぞ」

静かに扉が閉まる。

○住宅街（夕）

並んで歩く茉莉と瑞生。

瑞生「どうしてあんなことを？」

茉莉「ごめんなさい。だって、私のせいで亡

くなったようなものだし」

瑞生「何度だって言うよ。茉莉は悪くない。

全く悪くない。悪いのは、あの少年」

茉莉「……」

瑞生「忘れるのは難しいと思うけど、必要以上
上に考えることもない」

茉莉、そっと瑞生の手を握る。

瑞生、ぎゅつと握り返す。

瑞生「大丈夫、僕が守るから」

茉子、頷いて歩き出す。

○石井家マンション近くの道路

茉子、自転車に乗っている。かごには
買い物袋。

通り過ぎる人がちらちらと見ている。

茉子、顔を伏せて速度を速める。

突如、人影が飛び出してくる。

慌ててブレーキをかける茉子。

記者「ちよっとお話よろしいですか？」

茉子、無視して自転車を漕ぎ出そうと
する。

記者「同級生、だったのですよね？」

茉子、記者にさえぎられ、上手く進め
ない。

記者「しかもそれを隠しておられたと」

茉子、記者の横を通り過ぎようとする。
記者「巻田さんご一家を、どうやって言いく

るめたんですか？」

茉莉「言いくるめたって」

記者「何かおっしゃりたいことが？」

茉莉、今度こそ自転車を漕ぎ出そうとする。

記者「逃げるおつもりですか？」

と、茉莉の自転車の荷台を強く掴む。

茉莉、バランスを崩し、転倒する。

通行人がざわつく。

記者、その場を足早に去る。

茉莉、起き上がりながら手のひらを見る。血がにじんでいる。

目の前には、放り出された買い物袋。

卵が割れている。

茉莉「深いため息」

○石井家マンション・リビング（夜）

茉莉のケガした手のひらをそっと握る

瑞生。

瑞生「その人、名前とかは？」

茉莉「分からない。てかこのくらい大丈夫だよ。それより卵。特売だったのに」

瑞生「そんなものこそどうでもいい！」

茉莉「(びくついて)ごめん」

瑞生「あ、いや。最低だ、茉莉に当たるなんて。また茉莉を守れなくて、最低だよ、僕は最低だ」

茉莉「瑞生は悪くない。私たちは、何にも悪くない。そうでしょ？」

瑞生、茉莉を抱きしめて、

瑞生「ありがとう」

茉莉から離れ、目を合わせる。

瑞生「でもいい？何かあったらすぐ僕に連絡して。警察も呼んで。約束」

茉莉「うん、約束」

瑞生、もう一度茉莉を抱きしめる。

○同・玄関前(日替わり・朝)

すっかりキレイになっている。

○同・リビング

窓の外は雪がちらついている。

テレビは、芸能人の不倫について報道
している。

瑞生「じゃあ仕事行くね。とじまりはしっか
り。買い物は帰りに行ってくるから」

茉莉「いいよ、私行くよ」

カーテンを開けて、

茉莉「ほら、マスコミの人だって誰もいない
し、世間も忘れて……」

瑞生、シャッとカーテンを閉めて、

瑞生「もし、茉莉に何かあったら」

茉莉「何かかって、一度だけだし」

瑞生「それでも。せっかく助かった命、大切
にしなきゃ」

茉莉「うん」

瑞生「茉莉には僕がいるんだから。頼って。

ね？」

茉莉「ありがとう」

○同・玄関

手を振って出て行く瑞生。

手を振り返す茉莉。

外から鍵の閉まる音。

チェーンを掛ける茉莉。

茉莉「ため息」

○巻田家・リビング（日替わり）

テーブルには佳史の母・佳織。

隣でひまり、絵本を読んでいる。

優香里、お茶を出して、

優香里「ひまり、ちよつとだけお部屋で本を

読んでくれる？」

ひまり、佳織を見て、

佳織「ばあばも後で行くね」

ひまり、頷いて部屋を出て行く。

佳織、部屋を見渡す。

佳史も映った家族写真があちこちに飾

られている。

優香里「どうぞ」

佳織 「ああ、ありがとう」

と、お茶を飲む。

佳織 「優香里さん、あのね」

優香里 「はい」

佳織 「佳史の物を、引き取ろうかと思って」

優香里 「……」

佳織 「捨てようってわけじゃないの。ここからうちに、移そうかと」

優香里 「それは、その」

佳織 「優香里さんもまだ若いし、佳史のこと

は気にせず、新しい生活を考えてもいい……

……

優香里 「私には佳史くんしかいません」

佳織 「そう言ってくれるのは嬉しいけれど。

でも、ひまりちゃんも」

優香里 「ひまりは、私がしっかり育てます」

佳織 「そうよ、そうよね。でもね、そんなに

苦しんで頑張って生きる必要はないのよ」

優香里 「……お気遣いありがとうございます。……」

すみません、お義母さんも辛いのに」

佳織 「静かに首を横に振る」

優香里 「ただ、片づけるタイミングは、どうか私に任せていただけませんか。私もいつまでもこのままがいいとは思っていないんです。ひまりのためにも。仕事も始めようと思っただけ。でも、もう少し、もう少しだけ」

佳織 「無理はしなくていいから。ゆっくりでいいからね」

優香里 「ありがとうございます」

佳織 「何かできることがあったら、いつでも言っただけ。ひまりちゃんにも会いたいし」

優香里 「はい」

佳織 「さて、絵本でも読んでこようかな」

優香里 「ありがとうございます」

テーブルを離れる佳織。

優香里、飾られている写真を見つめる。

かわいらしい写真立ての中には、満面の

笑みの佳史、優香里、ひまり。

○同・子ども部屋（夜）

気持ちよさそうに眠るひまり。

○同・寝室

クローゼットを開けて、遺品を整理する優香里。男物の洋服がベッドに並ぶ。アルバムもいくつも広げられている。ひまりの生まれた頃に撮った家族写真。旅行の写真。結婚式の写真。

優香里「大きく深呼吸」

一つの箱を開けると、手作りのアルバムが出てくる。中には付き合っていた頃の思い出の写真。

ほろほろと泣き出す優香里。

さらに、手紙やちよつとしたメッセー
ジカード、映画の半券なども出てくる。

優香里「こんなものまで……」

次々と涙があふれる。

優香里「佳史くん、置いてかないでよ……」
と、アルバムを抱きしめ泣く。

ふと、クローゼットの奥にまだ小さな箱があることに気づく。

優香里、そっと手を伸ばし、箱を引き寄せる。

蓋を開けると、写真らしきものが。

制服を着ている若い佳史。

その隣の女子生徒は茉莉。面影がある。

みるみるうちに怒りをあらわにする優香里。

優香里「あの女あああああっ！！！」

写真を、佳史と茉莉の間で破く。

サイドデスクの上にあるものや引き出し

の物を投げ散らかす。

× × ×

（子ども部屋）

はっと飛び起きるひまり。

× × ×

優香里、投げた物の中からはさみをつ

かみ取る。

写真の茉莉を、叫びながら何度も刺す。

枕や布団もやぶけ、羽毛が舞い散る。

× × ×

(子ども部屋)

布団にくるまり、震えるひまり。

× × ×

肩で息をする優香里。

○石井家マンション・リビング(夜)

テーブルの上には、筆跡をごまかした

手紙が多数。「死んでください」「佳

史くんを返して」など書かれている。

静かに見下ろしている茉莉。

瑞生「たぶん、あの奥さんだろうね。今さら

どうしたのか分からないけど」

茉莉「黙って頷く」

瑞生「一応、取っておこう。証拠になる」

茉莉「証拠って……」

瑞生「いざという時」

と、束ねた段ボールを抱える。

瑞生「これ、捨ててくるね」

茉莉「……」

瑞生「日常生活は大事にしなくちゃ」

茉莉「うん」

瑞生、玄関へ向かう。

ドアが開く音。

瑞生「うわあっ」

茉莉「瑞生！？」

と、瑞生のもとへ駆けつける。

二人で玄関の外を覗く。

生ごみが散乱している。

瑞生「片づけるね」

茉莉「私やるよ」

瑞生「いいよ、茉莉は中にいて」

茉莉「これも、写真撮っておく？」

瑞生「あ、そうだね」

○同・エントランス（朝）

出勤する瑞生。

小学生とその親と会う。親は子どもを抱え、なるべく瑞生から離れるよう促

す。

ゴミ捨て中の住人も、目を逸らす。

掃除をしている管理人、穏やかに挨拶。

瑞生、かろうじて微笑み返す。

○同・寝室

鏡台の前の茉莉。鏡を見て唇をなでながら、

茉莉「どうして、どうして最後まであんなことするの……」

○（回想・十五年前）学校・教室（夕）

キスをしている佳史（15）と茉莉

（15）。制服姿。

茉莉「……こんぺいとうみたい」

佳史「ん、どういうこと？」

茉莉「ちよっと、とげとげしてる」

佳史「え、唇荒れてるってこと？」

茉莉「ちーがーうーよー、もうっ」

佳史「でも甘いんだろ？」

茉子「まあ、うん」

佳史「茉子はかわいいいな」

と、頭をなでる。

茉子「またそうやって。他の子にも言ってる

くせに」

佳史「本命は茉子」

茉子「本命がいる時点でおかしいよ」

佳史「じゃあ、茉子は俺のことキライ？」

茉子「∴∴（首を横に振る）」

佳史「ありがとっ」

と、もう一度キス。

○同・同（日替わり）

弁当を食べている茉子とその友人。

友人「まじでやめときなよ」

茉子「でも優しいんだよ」

友人「誰にでもね」

茉子「そう、だけど」

友人「しよっちゅう泣かされて」

茉子「でも、なんか、なんだろう」

友人「私がいてあげなきゃダメ、みたいなの？」

あー危ないやつ」

茉莉「ううん、もっと深いところで繋がってる、みたいなの」

友人「絶対気のせいだから」

茉莉「ホントに、ホントに……うまく説明できなけれど」

○（一年後）同・正門

卒業証書を手にも、写真を撮る生徒たち。

複数の女の子から写真を頼まれる佳史。

距離も近く、ボディタッチも多い。

離れたところから見ている茉莉。

ため息をつく友人。

佳史、ちらりと茉莉を見て、また近く

の女子と話を始める。

目がうるんでくる茉莉。

友人「これがいいたイミングじゃないの？」

と、去る。

俯いている茉莉。

そこへ差し出される瓶。中にはこんぺいとう。

はっと顔を上げると佳史がいる。

佳史「こんぺいとうなんでしょ？ 俺」

茉子、瓶をそっと両手で包む。

佳史、茉子のおでこにキス。

照れて微笑む茉子。

○（二年後）公園

髪色を少し明るくした佳史（20）と、パーマをかけている茉子（20）。

佳史「俺たちね、一緒にいてもしあわせにならない」

茉子「私怒ってないよ、他の女の子と出かけたのとか」

佳史「そうじゃない」

茉子「私の何がダメ？ 変えるから、努力するから」

佳史「どっちもしあわせになれないんだよ」

茉子「意味わかんない」

佳史「俺は茉莉にしあわせになつてほしい。

だから、おれがいちやいけないと思う」

と、背を向け去っていく。

茉莉「ねえ、ちゃんとこっち向いて！　目を

見て！　よつくん！」

（回想おわり）

○（現在）石井家マンション・寝室

鏡台の引き出しを開ける茉莉。

こんぺいとうの入った瓶がある。

ぐっと奥に押し込み、引き出しを閉める。

○同・リビング（夜）

瑞生「ただいま」

と、ドアを開ける。生卵まみれになつている。

茉莉「ひどい、なにこれ。とりあえず、夕オ

ル……」

瑞生「大丈夫だよ、これくらい」

茉莉「これくらい、じゃないよ。犯人は見

た？」

瑞生「暗くてよく分かんなかった」

茉莉「警察、行こう」

瑞生「それはダメ。こういうのは反応しない
のが一番だよ。それに事は大きくしない方
がいい」

茉莉「でも」

瑞生「茉莉に何かあったら困る」

茉莉「瑞生だってよくないよ！」

瑞生「今回のが、茉莉じゃなくてよかった」

茉莉「瑞生……」

瑞生「ねえ、いつそ引越しちゃう？」

茉莉「え」

瑞生「どこか、暖かくて住みやすいところが
いいなあ」

茉莉「でも、今、仕事も順調で楽しいって」

瑞生「そんなのはまた探せばいいよ。茉莉を
危ない目に合わせたくない」

茉莉「でも」

瑞生「フリーランスで在宅の仕事するのいいな。そしたら茉莉とずっと一緒にいられる！」

茉莉「……」

瑞生「しごとなんてね、暮らしていけるならなんでもいいんだ。僕は、茉莉との生活が一番大事だよ」

茉莉、瑞生に抱きつく。

瑞生「ちよっと、汚れちゃうよ！」

構わず抱きしめる茉莉。背中に回した

手は、洋服を鷲掴みにしている。

そして、少し震えている。

× × ×

(イメージ)

ころがるこんぺいとう。

× × ×

○ 同・玄関(夕)

段ボールを抱えた管理人と茉莉。

管理人「心当たりある？」

茉子「いえ……」

管理人「一応石井さんのお名前あるからね、勝手に捨てるのはよくないなあと思って」

茉子「ありがとうございます」

管理人「私、もう帰る時間でね。本当は旦那さん帰って来るまで預かっておいてあげたいんだけど」

茉子「大丈夫です。もうすぐ帰って来ると思うので」

管理人「一緒に開けようか？」

茉子「そんな、お気遣いなく。もらいますね」

段ボールを受け取る茉子。しつとりと底が濡れていることに気づく。

よく分からない液体が滴る。

茉子「ひゃあっ」
と手を離し、段ボールが落ちる。

底が破けると、動物の足らしきものが見え、濁った液体が流れ出てくる。

管理人「うわあああ！」

茉子「いやああっ」

瑞生「茉莉！」

と叫んで、駆け寄ってくる。

茉莉を抱きしめ、崩れた段ボールを見
下ろし、

瑞生「……」

○同・リビング（夜）

瑞生「訴えよう」

茉莉「え？」

瑞生「警察にも連絡して、民事訴訟もする」

茉莉「そこまでしなくても」

瑞生「相手は命を平気で奪える人間だよ。茉
子に何かあってからじゃ遅い」

茉莉「でも、事は大きくしない方がいいって」

瑞生「ここまできたら、逆にマスコミを味方
につけたっていい。思い知らせなきゃ」

茉莉「でも、でも、あの方もきつと追い詰め
られてて」

瑞生「追い詰められたら何をしてもいいの？」

茉莉「そうじゃないけど」

瑞生「茉莉とあつちの旦那さんは、もう何の
関係もない。ただの同級生だったってだけ。
そうでしょ」

茉莉「…う、うん」

瑞生「亡くなったのは確かに気の毒だけど、
ここまでされる理由なんかないよ」

茉莉「そう、だけど」

瑞生「大切な人が亡くなったら、そりゃ苦し
いよ。つらいよ。でもその苦しみを他人に
も負わせていたら、いつまでたっても苦し
みから抜け出せない。これは、あの家族の
ためでもあるんだ」

茉莉「…」

瑞生「それに、僕は茉莉をなんとかしてでも守
りたいんだ」

茉莉「じゃあ、一度、会いに行かない？」

瑞生「あの奥さんに？」

茉莉「ちゃんと話をして、それで分かっても

らうというか」

瑞生「茉莉は優しすぎる」

茉莉「でもまだ小さい娘さんもいて、あの子の将来とか考えたら、警察とか裁判とか、できれば避けたいよ」

瑞生「……」

茉莉「……瑞生……」

瑞生「分かった。一度だけ話し合いの場を持つとう。でも、言っても通じなかつたら警察に連絡する。いい？」

茉莉「うん」

瑞生「連絡手段がないから、押しかけるしかないけど」

茉莉「それだけが、ちよつと心配だね」

瑞生「他にも心配事はあるけど」

茉莉「大丈夫だよ、話せば分かる、きっと」

瑞生「だといいいけど」

○巻田家・リビング（日替わり）

優香里「どういったご用件で」

瑞生「心当たりがあるので？」

優香里「何のことでしょう」

瑞生、手紙や玄関前の生ごみ、動物の死体が入った段ボールの写真を並べて行く。

優香里「……」

茉莉「私たち、大ごとにしたいわげじゃないんです。できれば、穏便に済ませたくて。でもご近所の方とか、噂になり始めていて」

ドアの陰から様子を窺っているひまり。

茉莉「それは巻田さんご一家にとってもよくないと思うんです」

優香里「だから、うちは関係ありません」

瑞生、手紙を撮った写真を指して、

瑞生「亡くなった巻田さんを佳史くんなんて呼ぶのは、お知り合いだと思いますが」

優香里「だったらなんなんですか!？」

びくつと肩をすくめるひまり。

瑞生「認めるんですか?」

優香里「あんたが、あんたが佳史くんをたぶ

らかすから!」

茉莉「私は、巻田さんとはなんの関係も」

優香里「あるだろうか！　付き合ってたんだ

ろ！！」

瑞生「茉莉？」

茉莉「そんな、学生の頃の、もう十年以上前の話です」

優香里「やましいから隠してたんじゃないのかよ！」

茉莉「本当に今は何も！」

優香里「うるさい！」

と手あたり次第物を投げる。

瑞生、茉莉を抱きしめて守る。

瑞生「話にならないよ。帰ろう。警察にも連絡しよう」

茉莉「……」

瑞生「大丈夫、茉莉は僕が守るから」

優香里、ふらりとキッチンへ向かい、

優香里「出てけ」

手には包丁。

茉莉の頭の中に、事件の日の悲鳴が蘇る。

茉莉「叫ぶ」

瑞生、優香里の腕を掴んで包丁を奪い
取ろうとする。

ひまり「やめて！」

はっとする優香里。

ひまり「ママをいじめないで！！」

手を離す瑞生。包丁が床に落ちる。

ひまり、優香里に駆け寄り、瑞生の前
に立ちはだかる。

瑞生、両手を挙げ、何もしないことを
示し、ゆっくり後ずさる。

茉莉「震える泣き声」

瑞生、怯える茉莉を抱きかかえる。

優香里「私たちはちゃんと愛し合っていて、
佳史くんが本当に好きで、佳史くんも私た
ちを大切にしてくれて、佳史くんは、私た
ちを愛していたんだから。本当なんだから」

泣き崩れる優香里を、ひまり、抱きし
める。

よく見ると、キッチンや部屋の隅など

片付いていない。

茉莉、瑞生の服をぎゅっと掴む。

瑞生、その手を握って、

瑞生「今日は帰ります。巻田さんも、冷静になつてください。大切な人は、まだいるのですから」

泣いて俯いたままの優香里。

ひまり、その背中をそつとなでる。

茉莉「ひとつだけ」

瑞生「茉莉っ」

茉莉「瑞生に危害を加えるのだけはやめてく

ださい」

瑞生「茉莉、いいよ」

茉莉「瑞生は関係ないから」

優香里「何を言ってるの？」

茉莉「卵！ 生卵投げつけたでしょ！ 一週

間前よ。夜、帰り道に！」

優香里「なんのこと？」

茉莉「なんで今さらごまかすのよ！ あなた以外に誰がいるっていうの！」

優香里「ホントに、それは、知らない」

茉莉「認めなさいよ！」

優香里「証拠はあるの！？」

茉莉「証拠？」

優香里「その時の、写真。他は撮ってあるじゃない」

茉莉、瑞生を見上げる。

瑞生「……」

茉莉「あの時は、それどころじゃなくて」

優香里「本当にそれは知らない」

瑞生「もういいよ、茉莉」

茉莉「でも」

瑞生「君は大人しく僕に守られてて？」

茉莉「私だって瑞生を守りたいっ」

瑞生「嬉しい。じゃあ、これはもういらねえね」

瑞生、ポケットから小瓶を出す。中にはこんぺいとう。

茉莉「どうして、それ！」

瑞生「卵まみれになったかいがあった」

茉莉「あれ、自分でやったってこと？」

瑞生「だって、茉莉のことは僕が守るから。

君には僕がいること、ちゃんと知っておいてほしかったんだ」

困惑する優香里。

瑞生「でも、もう大丈夫だね」

と、小瓶を持った手を振り上げる。

茉莉、その手を掴んで

茉莉「ダメっ」

瑞生「茉莉のことは僕が一生守るよ」

と、腕を振り下ろす。

粉々に割れる瓶。散らばるこんぺいと
う。

ひまりを抱き寄せる優香里。

瑞生「もう十年以上経って食べられないしね」

こんぺいとうをかき集める茉莉。

優香里「十年？」

瑞生「もらったんでしょ？ 佳史さんに」

優香里「は？」

茉莉「お、思い出、思い出だから……」

瓶のかけらで手を切り、血が出る。

優香里「忘れてないじゃない！！」

瑞生「さあ、帰ろう、茉莉」

茉莉「（独り言のように）よっくんなの、こんぺいとうは、よっくんなの」

と、震える手で一粒つまむ。

瑞生「茉莉！ 茉莉の夫は僕でしょ！」

茉莉の腕を掴む瑞生。

こんぺいとうを口に放り込む茉莉。

瑞生「そんな古いもの、食べちゃダメだ！」

と、茉莉の口をこじ開けようとする。

茉莉、口の中でこんぺいとうを転がして、

× × ×

（茉莉のフラッシュバック）

刺された佳史、茉莉の頬をそっと両手で包み、

佳史「——（二文字で動く）」

× × ×

茉莉、瑞生を振り払って、

茉莉「私だから」

と、優香里に目を合わせる。

茉莉「私だから」

優香里「なに？」

茉莉「最後に呼んだの、私の名前だから！」

優香里「はあ！？」

茉莉「こんぺいとうの味がしたの！甘かつ

たの！よっくんは、私のことをずっと、

ずっと覚えてたんだから！」

優香里「黙れえ！！」

ひまり「(大声で泣き出す)」

瑞生「つらい思い出だもんね。改変したくも

なるよね」

瑞生、茉莉を抱きしめようとする。

茉莉、振り払う。

茉莉「私のことを分かってくれるのは、よっ

くんだけなの。何があっても、守ってくれ

るのは、よっくんだけなの！！」

瑞生「茉莉には僕しかいないって言ってるだ

ろう！！死んだんだよ！あいつは死ん

だんだん！」

ひまり「(ますます泣き声が大きくなる)」

優香里「やめてよ！！」

茉子、残りのこんぺいとうをかき集め、
部屋を飛び出る。

瑞生「茉子！！」

○SNSの投稿

茉子の写真。

「石井茉子は悲しみにふける遺族の気
持ちを踏みにじる略奪女です」

コメント「あの事件だ」

コメント「最後のは事故だと思っただのに。

家族の前で、最低」

コメント「こんなやつが生き残るなんて」

コメント「石井茉子を許すな」

○イメージ

小さな瓶に入っていくこんぺいとう。

○ SNS

帽子を深くかぶった茉子の写真。

コメント「岐阜県で見かけました」

× × ×

マフラーで顔を隠す茉子の写真。

コメント「札幌で発見！！」

○ イメージ

小瓶の中のコペいとう。角が取れて、
やや丸くなっている。

○ まとめサイト

「石井茉子の今は？ 整形したって本当？」

○ イメージ

小瓶のこんぺいとう。いくつも溶けて
くっついている。

○ 別のまとめサイト

「ショッピングモールでの惨劇　まと
め」

「被害者で唯一亡くなった男性を自分
のものだと言い張る女」

○ イメージ

小瓶のこんぺいとう。溶けたものが、
いくつかに割れている。

○ ネット掲示板

レス「死んでるのに自分の物とか怖くね？」

レス「今どこ？　同じ職場とかムリ」

レス「四国という噂」

レス「九州では？」

○ イメージ

小瓶のこんぺいとう。粉々になってい
る。

○ (七年後) 公園 (夕)

ひとけのない公園。

ベンチに座る茉莉（33）。やつれており、服装もくたびれている。

手の中には薄汚れた小瓶。中身はこんぺいとうだったもの。劣化により粉々になっっている。

胸の前で抱いて、大きく深呼吸。

茉莉「大丈夫、大丈夫……」

そこへ近づく制服姿の陰。

少女「石井茉莉さんですか？」

茉莉、ゆっくりと顔を上げる。

中学生くらいの少女が立っている。

少女「この町に戻って来てるって本当だった

んですね」

茉莉「子どもでも知ってるの？」

少女、スマホを見せる。

少女「写真とだいぶ違うけど。面影はありま

すね」

茉莉「もう何年経つてると思ってるの」

少女「物好きな人が、ずっと探ってるみたい

です。旦那さんだって説もあります」

茉子「もう忘れてくれたらいいのに……」

少女「別れてないんですよね？」

茉子「連絡取ってないからね。勝手に離婚っ

てできないんだね」

少女「そういうものなんですか」

茉子「何の用？ ネットに上げるの？」

少女「いいえ、お話がしてみたくて」

茉子「有名人だから？」

少女「隣、座っていいですか？」

茉子「おうちの人に怒られない？」

少女「たぶん、大丈夫です」

茉子「かろうじて、犯罪者にはまだなっ

かったんだけどな」

少女、茉子の隣に腰かけて、

少女「隣に座るのは何罪ですか？」

茉子「罪名が付かない方が苦しいかもね」

少女「意味深すぎます」

しばらく沈黙が続く。

茉子「私みたいなおばさんに会ってどうする

の
」

少女「お礼を」

茉莉「ん？」

少女「私、あなたたちに助けてもらった、あの時の子どもです」

茉莉「……」

× × ×

(フラッシュ)

逃げる客の中で、つまずいて動けなくなる少女。

× × ×

(フラッシュ)

少女を抱きしめ、ぎゅっと目をつむる茉莉。

× × ×

(フラッシュ)

少女と茉莉に覆いかぶさる佳史。

× × ×

(フラッシュ)

惨劇を見ている少女の瞳。

× × ×
茉子の目の前にいる少女の瞳。
茉子「なんで」
少女「なんで、って。助けてもらったので」
茉子「そうじゃなくて、どうして、その、今いくつ？」
少女「十四歳、中学二年生です」
茉子「お、大きくなった……ね」
少女「七年経ってますから」
茉子「覚えてるの？あの時のこと」
少女「忘れられないというか」
茉子「そらそうだよね」
少女「眠れないような恐怖はもうないですけど」
茉子「……よかった」
少女「でもお二人のことは、何年かあとで調べました」
茉子「それで、名前を」
少女「すごいことになってたんですね」
茉子「すごいこと、が、あったかもしれない

ね」

少女「私、事件のすぐあとは、ありとあらゆる情報を遮断されていて。家族もみんな、忘れさせようと必死でした。私も忘れたかっただし、忘れた方がいいんだろっと思ってました」

茉莉「うちの人はそう思うよ、あんなの少女「でも、あなたたちが大変なことになっていたように、私も、標的にになりました」

茉莉「…：…：なんで」

少女「あのととき、おまえがこけなければ」

茉莉「…：…：え」

少女「あのととき、母親が手を離さなければ。

あのとすぐに、親子でないと釈明してお

けば」

茉莉「そんなの！」

少女「私の前では、父も母も祖父母もみんな明るく振る舞って、甘いものとか、楽しい映画とかいっぱい見せて、ネットやテレビは全部排除して、毎日毎日笑っていたけど、

でも知ってるんです。父も祖父母も、知らない人たちと同じように母を責めていたこと。おまえが手を離さなければ」

茉莉「そんな、あの状況で！」

少女「私も、最初は自分がこけたからいけないんだ、私が迷惑をかけたんだって思っていて、だから笑って明るく振る舞わなきゃって思ってたんですけど。母はあの時、泣いていた弟を抱っこしていたんです。そして父は、あの人混みの中、スマホを見ながらひとりで先に歩いてたんです」

茉莉「それは、お父さん」

少女「あのとき、事件のあった一階じゃなくて二階のフードコートに行っていたら。そもそも、あんなに人の多いところに出かけていなければ。父はどんどん母を責めました。それを聞いてて思いました。あの場で悪いのは、包丁を持っていたあの男の人じゃないの？」

茉莉「……そうだよ」

少女「未成年だから名前も分からなくて、死
んじやったから動機も分からなくて。実は
家庭環境が悪かったとか、いじめがあった
とか言われているけど、じゃあ、もしいじ
めが解決していたら、そもそもいじめがな
ければ。いや、いじめ加害者にもいじめに
至るようなきっかけがなければ。もう、本
当の、根本の悪なんて分からないんです」

茉莉「……」

少女「断片で判断するのはよくないけれど、
この世は全てが、いろんなところで繋がっ
ているから。もしかしたら今日、私が道を
歩いたことが、誰かに何かの影響を与えて
いるかもしれない。そんなことないなんて
言い切れない。だから私は、断片で判断し
ます」

茉莉「え？」

少女「私はあるとき、あなたに助けられ、も
う一人の男の方に助けられた。だから今が
ある」

茉莉、小瓶を握る手が震える。

少女「父と母は険悪になって、知らない人から怖いことをいっばい言われて。でも、友だちと行った修学旅行は楽しかったし、今も部活や勉強が忙しくて充実してる。生きててよかった」

茉莉、ほろりと涙を流す。

少女「助けてくれて、ありがとうございます。ました」

しっかりと頭を下げる。

茉莉も、深々と頭を下げる。

少女「あなたも」

茉莉の小瓶を指さして、

少女「見たいことだけ見てもいいんじゃないですか？ 詳しいことは何も知らないけれど。それで生きていけるなら、そんな時間があってもいいと思います」

茉莉「……ありがとう」

少女「この私の無責任な発言が、影響に影響を及ぼして、何か起こるかもしれないけれど

ど
」

茉莉「それでもいいよ。私たちは、あのとき

生きる道に進んだんだから」

少女「てか、その粉、なんですか」

茉莉「こんぺいとう」

少女「え、どこが」

と、笑い出す。

茉莉もつられて微笑む。

（おわり）

○タイトル「こんぺいとうを一粒」

二〇〇字詰原稿用紙換算枚数… 108枚